かりか、国民全体が未だ「安心への目途」を立てていない。マスメディア・新聞などの論調も東電・国当局の不作為、不定見を声高に攻めるが、安全への長期的過程に関する言は余りにも少ない。〈F―1〉の放射能対策および原子炉諸問題はもはや、日本人が抱える3大宿阿の1つか、即ち、災害列島に暮らす覚悟、少子高齢化と移民増による文化的アツレキの容認と並んで。〈F―1〉問題は複雑多岐にわたるとも国民が運命論的に対処すべき課題ではない。〈F―1〉事故は国家的人災である。よって、対処策は「国民が、あるべき合理的なコンセンサスに沿う対策」を選べる状況を創ることが、いま求められる機を迎えている。

これ以後、私なりに原発事故後の現実を知るためにインターネットを中心に情報収集するよう努力を始め、そして更に環境委員会の場でそれを発表するようになった。情報を様々な立場の人の目にさらし、お互いに検討する過程は有意義であり、環境委員会はその貴重な場であった。そしてこのたび、それを更に広く会員へ発信すべく、「善隣」誌への環境委員会からの寄稿に至った次第である。

事故後、今も戦争にも匹敵する国難の真っ最中である。原発では、今も4000人を越える人たちが廃炉、汚染水対策などの事故の後始末に、身をすり減らして働いている。原発周辺の市町村の元住民のほとんどの人たちはいまだに戻れていないし、「避難指示解除」ということにされて戻った人たちも、不自由で、以前よりはるかに強い放射線に曝される生活を強いられている。民主政治体制とされている社会の中で、何も知らないでいることは、場合によっては誰かに危害を加えていることと同じであろうし、いずれ自分の身に振りかかる災いから目を背けて放置していることにもなろう。原発に対する考えが肯定的であろうと、否定的であろうと、今何が起きているのかを知るべきだし、いつも知ろうとの努力が必要だ。更には、可能な限り科学的にも理解するよう努めるのが望ましい。国際善隣協会、特に環境委員会はそのための大きな可能性を持っている。その観点から、ここに環境委員会での議論をふまえた伊大知氏の文章がある、と読んで頂ければ幸いである。これからも、更なる発信に期待、そしてそれへの検討や批判が多くの会員からなされることも大いに期待したい。

福島第一原発事故後

―環境委員会からの発信に当たって―

藤木英夫（会員）

2013年9月の安倍首相のオリンピック招致演説に、何ともやり切れない違和感を引きずっていた頃、書店で平積みにされている本の題名に目を引きつけられた。

『汚染水はコントロールされていない』（荻野晃也著、第三書館）。

著者は原子核工学の専門家であるが、素人向きに誰にでも分かるように努力して書かれており、福島第一原発の事故後の状況を詳しく知ることのできる本だった。それでも、内容豊富、読み進めるのには骨が折れ、今でも私はどれくらい読みとれたのか、自信は全くない。それでも、私がこの本の題名を持ち出す暴挙を敢えてするのは、公開情報、特にインターネットを通じて得た情報を整理検討するだけで、今の生の現実をかなりの程度詳しく知るのが可能なことをこの本が気づかせてくれ、私に大きなインパクトを与えたからだ。